

# 月刊 千葉労働動力



## ひとまずに たたかいてみる

### 岩井章(元総評事務局長) 9・8集会講演

九・八労働者総決起集会は、二八〇名の参加のもとに大成功した。この集会での岩井章氏(元総評事務局長・国労顧問)の講演の要旨を掲載します。(文責・日刊労働千葉編集委員会)

清算事業団闘争は、結論から言って勝利以外にない、ということだ。

地労委はこれまで、そうたやすく労組側の勝利命令を出したことはなかった。それが清算事業団闘争は地労委において、次々と勝っていった。それほど明確な不当労働行為だということだ。

中労委も判断を下すのは、弁護士や大学教授など法律の専門家、学識者である公益委員だ。これは地労委も中労委も同じ、だから地労委とちがう命令は出ない。中労委がぐずぐず、もたもたしているのは、命令を出すすれば、地労委とおなじもの以外にないから。だから命令を出したくないからだ。ここには政府・財界が圧力をかけているからだ。

敵は何一つ妥協するハラはない。ズルズルとやって、国労がつぶれること

を狙っている。日をかせいでいれば、なんとかなるとおもっている。敵は国労が「命令」を求めてくることを恐れている。命令が出てもしあたっては知らん顔をしているかもしれないが、それにたいする世論の批判のたかまりを恐れている。また支援の拡大も作りだせる。

清算事業団闘争や国労の闘い、そして千葉労働の闘いも、たしかにきびしいが、長期的見通しをもってやっていくことだ。

JRの現状は、弱点を多くもっている。株上場はできなかった。日本の経済全体がメになってきたから。次は新幹線の真取の問題。事故も多発している。今までの労務政策も崩壊だ。西・東海の分裂は、四国・九州、さらに松崎の東にも波及するだろう。JRの根本のところ破綻している。

中曾根は抵抗する労働組合、闘う労働者は許さない、ということとで分割・民営化をやり労働運動つぶしをやってきた。そうやって出来た連合のなにも矛盾が出てきている。連合の下から

も不満が起きている。反乱は必ず起こる。すぐとはいかないが、連合は長期的には崩れる。そのとき国労や千葉動力が頑張りつづけたことがものを言う。敵は、闘う労働運動と連合の下部の合流を恐れている。こうした長期的見通しにたつたたたかうことが必要だ。

国労のたたかいはの上で三つのことを言いたい。一つは率直に言って国労には弱点があり、それを克服することだ。社会党田辺委員会は妥協案のもとに国労を抱き込もうとしてきた。国労の中にも妥協の方向に行こうとしている人々がいる。

しかし、敵には妥協案などない。「妥協案」といってもせいぜい「関連会社」への再就職くらいだろう。相手に妥協する意思が全くないわけだから、妥協は成立しない。「早く終わらせたい」という気持ちはわかるが、どういう状態で終わらせるかが重要だ。

私は北海道の闘争団を回り、組合員や家族から直接話を聞いたが、みんな

な十万から十五万で生活している。本当に涙のするような状況だ。みんな「必ずカタキはうつ」「絶対にゆるさない」という固い決意を胸に秘めながらも、その上でいかに生活を支え、長期闘争体制をつくるか、ということを考えている。国労として五万くらいは何とかなる。家族から「たしかにつらいけど、いいかげんな妥協はするな」と言われた。

結論として、いかに耐えられるか、長期闘争を闘いぬけるか、ここにかかっている。百本の地労委命令、これは中労委もひっくりかえせない。その上で闘いを横にひろげることが必要。マスコミも書かざるを得なくなる。

もう一つは、JRの労働条件の問題だ。闘争団もきびしいが、JRの労働者もつらい。現職の労働条件の向上にむけてどう闘うか、これらを闘うことなしに勝利しない。

勝利の道のりは長い、しかし今まで闘ってきたことに自信をもって、あせらず闘いぬいてほしい。国労、千葉動力が姿勢をもちつづけることができるかどうか、ここにかかっている。

政治状況も混乱し、政治的圧力もあるが、これにとらわれず、労働者の立場に立ちきつて、毅然として、ひとすじに闘いをつらぬくことだと思おう。国労も千葉労働もこういう観点で闘ってほしい。

今後日本がどうなっていくのか、それを考えるとき、国労そして千葉動力を見守っていききたい。国労、千葉動力の共闘が一番と思うが、かりに出来なくても、それぞれの闘いの場で、仲間としてがんばってほしい。

